

バロックなロックをめぐる

リレーエッセイである。

今回私は何について書くのかというと、ロックについて書くのである。音楽のジャンルとしてのロックである。

「敬虔なキリスト教徒はロックを聴かない」「ロックは悪魔の音楽である」といった感覚というのは、現代では殆ど無効になっていると思うのであるが、しかし全くなくなったわけではないようである。先日、とある集まりの場において、自分はクリスチャンであるからロックなどは好まない、といった発言を聞き、少々驚かされたのであった。

私はロックが好きである。きちんとしたクリスチャンであるかどうかは、それは神様をご判断されることではないかと思う。

ただ、改めて確認しておかねばならないのは、ロックというのは非常に幅の広い音楽である、ということである。内村鑑三は、演劇も小説も、姦淫への誘惑があるからダメだ、と言っているのであるが、実際のところ、演劇にも小説にも、よいものからひどいものまで色々あるように、ロックも同様色々である、としか言いようがない。

そもそも、昨今の若者はさほど「ロック」にこだわりがないような気もするのである。

学会等の用があつて東京に行くと、ほぼ必ず、新宿や目白、御茶ノ水などでロックのCDを漁るのであるが、気づけば周囲は勤め帰りのサラリーマンのような客ばかりだったりする。なんとおっさん率の高いことか、と驚かされることであるが、何のことはない、私もまたおっさんの一人なのである。自分だけは違うと思っているに過ぎない。

以下、1970年代イタリアのロックについて少し書きたく思う。

ロックに本場というものがあるのなら、それはアメリカでありイギリスであろう。すなわち英語圏であろう。一般的にロックといえば、アメリカン・ロックでありブリティッシュ・ロックなのである。エルヴィスはアメリカ、ビートルズはイギリスである。

しかし、そのビートルズ以来、日本においても数多くのロックバンドがGSブームというくくりのもと生じたように、イタリアにもロックが生じたのである。

このあたりの事情は大体どこでも似通っているようである。ドイツ、オランダのような地理的にイギリスに近い地域では、とりわけ早い。これらの地域では60年代後半から盛んにロックバンドが生まれることとなる。なかんずくドイツはかなり凄いバンドを輩出した地域である。一方でスペインや東欧のような地域ではやや遅れ、70年代後半あたりから本格的になってくるようである。スペインはフランコ政権がロックを許さなかったという記述を読んだことがある。あるいはそういうことだったのかもしれない。東欧も当然冷戦最中のことである、似たような事情があつたと想定される。しかしポーランドや

ハンガリーなどでは60年代後半からロックバンドが活躍しているのである。単純に類型化はできない。

何故私がイタリアン・ロックにのめりこむこととなったか。それは、イタリアが、プログレッシヴ・ロック（所謂プログレ）の宝庫だからである。よって、イタリアン・ロックが好きだといっても、イタリア語は *tastiere* が鍵盤楽器であることくらいしかわからないし、他のイタリア文化は全く知らないのである。あくまでもプログレの文脈からイタリアに入っただけなのである。

プログレッシヴ・ロックとはロックの1ジャンルであり、本来は字義通り前衛的・進歩的なロックを表すものであったのであるが、その後の歴史の中では、ロックの一定の形式をあらわすものとなった。すなわち、クラシック的な組曲形式、ジャズ的な即興演奏などを取り入れ、ヴォーカル表現よりも器楽演奏表現の比重を増したロックである。

が、このあたり、言語による説明を重ねるよりも、具体的にCDを聴いていただいたらよいのではないかと思う。有名どころではピンク・フロイドの「狂気」あたりがわかりやすいのではないだろうか。世界一売れたロック・アルバムとしてギネスブックにも登録されているアルバムである。

結局、先に概念があってそれをもとにバンドが生ずるのではなく、数多くのバンドがあって、それらが奏でる音楽のなかから一定の傾向を最大公約数的に抽出し、プログレッシヴ・ロックと分類したというだけのことなのである。我々には分類できないと不安になるという傾向があるのであろう。であるから、しばしば、〇〇はプログレであるか、ないか、といった議論が生ずるのである。これは、寧ろ、私は〇〇をプログレとして聴いている、と表現するほうが、ふさわしいのではないか、と思われる。

なお、一定の形式、様式と化したものは既に保守的であり、プログレッシヴすなわち進歩的ではないのであるから、プログレッシヴというのはおかしい、というもっともな見解もある。

しかし、我々は音楽ジャーナリストではなくただの愛好家なのであり、自分好みの音楽を聴くことを求めているのである。音楽の未来像は二の次なのである。自分好みの音楽が「プログレ」という商品名で売られているだけなのであって、別にクラシカル・ロックでもシンフォニック・ロックでもなんでもいいのである。私はそういう音楽を、かれこれ20年以上も聴き続けているのである。

話をイタリアに進めることとする。

イギリスでは上述の如くにロックとクラシックやジャズが結びつき発生したプログレであるが、イタリアにおいては、クラシック、そしてイタリア民族音楽としてのカンツォーネ、あるいは地中海民族音楽といった、ロックと結びつく対象が非常に豊かであった（同様のことはラテンアメリカのロックにも言えることである）。さらに、国内の音楽産業・市場が発展していた。レコード会社に、イタリアの若いバンドの音楽を商品化し、配給するセンスと力があつたのである。そしてそこに、曖昧かついいかげんな言い方であるが、燃えたぎるラテンの熱き血のようなものがそそぎこまれ、他に例を見ないようなロックが生ずることとなったのではないかと思われるのである。

そうして生まれたイタリアン・ロックは概して何かが過剰である。哀愁、泣き、甘さ、臭みなどの感情表現が、過剰なのである。可愛らしさと激しさが奇妙に共存している。ブリティッシュ・ロックに関して、アメリカン・ロックとは違う翳り、湿り気といったものが指摘されることがしばしばであるが、ブリティッシュ・ロックの湿り気と比較すると、イタリアン・ロックは陽気なのであるが、しかしそれは健全な陽気さばかりではないのである。激情的であり、陰か陽かといえば陽であるが、明暗で言えば明ばかりではない。

器楽面での特徴としては、キーボード類の多用が挙げられる。オルガン、メロトロン、ピアノ、エレ

ピ、シンセサイザー等々である。また、しばしば管楽器、特にフルートが加わっている。ヴァイオリンなどのストリングスがレギュラーメンバーにいる場合もある。

興味深いことに、本国イタリアの次にイタリアン・ロックについて熱心な人々が多く存在するのは、日本であり、韓国であるようである。上述したようなイタリアン・ロックの過剰な感情表現には、はつきり言ってしまえば、演歌的、歌謡曲的な匂いがあるのである。それが東アジア漢字文化圏に暮らす我々の、どこかを掴んで揺さぶるのではないかと思われる（実は、ブリティッシュ・ロックにも、さらにアメリカン・ロックにも、その周辺部には、歌謡曲的なものが確実に存在する。しかしそれらは、英語圏ロックの世界ではメジャーな存在になれないのである）。恐らく専門的な音楽教育を受けていると思われるイタリアのロックシンガーたちは、呼気が多い発声法をするのであるが、それが、奇妙にGSのシンガーたちに似ている、ということもあるかもしれない。

面白いのは、イタリア本国のコレクターの間では、そういった歌謡センスは寧ろマイナスと捕えられがちであるらしい、ということである。仰々しいストリングスやヴォーカルの過剰なヴィブラート（つまりこぶしである）などは、耳障りな要素とされるらしいのである。

一般的にはあまり知られていないが、日本は結構なイタリアン・ロック復刻大国である。韓国にもSi-Wan や M2U といった、熱心にイタリア（そして大陸ヨーロッパ）のプログレッシヴ・ロックを復刻しCD化しているレーベルがある。とりわけ近年は、紙ジャケットCDの流行により、多くの作品が最復刻されるようになってきている。とはいえ多くは限定盤であり、通信販売、専門店、大型店でなければ入手し易いとは言えないのが現状である。例えば Sound1st にはほとんど入荷しない。

イタリアン・ロックの黄金期は 1971 年頃から 1975 年頃までである。石油ショックによる不況や塩化ビニールの高騰などが衰退の原因として指摘されるのであるが、しかし文化的事象の変遷とは物質的・経済的な理由だけで起るものではないようにも思われる。ともあれ、今となってはその真相を知ることとは不可能なのである。

以下具体例を挙げつつ、その紹介を進めていきたい。分量的制限もあるので、特に筆者が厳選した5つのバンドをとりあげる。全て、2009年3月現在入手可能なものである。

プレミアータ・フォルネリア・マルコーニ (P.F.M.)

Premiata Forneria Marconi

1973年に彼らの英語版アルバム「幻の映像」が国際配給されたことにより、好事家の目がイタリアへむくこととなった。いわば原点である。彼らはイタリアのバンドにしては、感情表現において抑制的などころもあり、それ故に国際デビューが可能であったとも考えられる。が、英語版1作目の「セレブレイション」や英語版2作目の「原始への回帰」を聴けば明らかであるように、やはりその音楽には熱にうかされて踊り続けているようなニュアンスがある。イタリアン・ロックは陽気さの中に、どこか不健康な匂いを湛えているものなのである。

レギュラー編成にヴァイオリンが含まれているのも特徴の一つである。上述の如く、彼らだけでなく、イタリア、そして大陸ヨーロッパのロックバンドにはしばしばヴァイオリニストが含まれている。ヴォーカル表現は比較的ナチュラルな、いわばフォーク的な穏やかなものである。

現在も活動を続ける彼らであるが、イタリア語版2作目「友よ」（上述「幻の映像」の原型となった作品である）、イタリア語版3作目「甦る世界」（やはり、英語版2作目「甦る世界」の原型である）等がとりわけ推薦できる。当然のことであるが、イタリア語版のほうが自然なヴォーカル表現が可能であり、柔らかく優しいのである。

クエラ・ヴェッキア・ロカンダ

Quella Vecchia Locanda

彼らもまたヴァイオリンをレギュラーに含む。特に1974年の2作目「歓喜の時」に参加したヴァイオリニスト、クラウディオ・フィリーチェの奏するヴァイオリンのつややかな音色は、数多いロック・ヴァイオリンの中でも一二を争う美しさである。

ピアノ、ヴァイオリンを多用し、ヴォーカリストもなめらかに歌う彼らの音楽が、ロックの一般的なイメージからかなり離れているのも事実であり、これを聴いてこれはロックではない、と判断される方もおられるかもしれない。しかし彼らはその短い活動期間中、ロックバンドと認識されていたのであるし、我々はこれを、イタリアン・ロックとして、聴いているのである。

彼らの作品は、CDで復刻されるまでは大変な希少盤として、中古レコード店の壁を飾っていたと言われる。

バンコ・デル・ムトゥオ・ソッコルソ

Banco del Mutuo Soccorso

ヴォーカリスト、フランチェスコ・ディ・ジャコモのオペラ的な歌唱に特徴があるバンドである。彼は外見もオペラ歌手のような巨漢なのである。またノチェンツィ兄弟のダブル・キーボードを中心とした演奏は複雑に絡み合い、迷宮さながらである。楽曲の奇抜な展開は群を抜いている。

彼らのデビュー作はつぼ型の貯金箱の形をした変形ジャケットに収められており（Banco=Bankだからである）、そのコイン投入口からはメンバーの写真が飛び出るようになっていた。このジャケットは復刻紙ジャケットCDでも再現されている。試みとしては愉快であるが、棚に収納できないのは困りものである。流通関係者も頭を悩ませたのではないかと思われる。イタリアン・ロックのレコードにはこのような凝った仕掛けのあるジャケットに収められたものも数多く、それもまたコレクターの気を惹いてやまないのである。

作品数は多いが、件のデビュー作（1972年）、2作目「ダーウィン」（1973年）、1976年の「最後の晩餐」等が特に推薦できる。

ニュー・トロルス

New Trolls

彼らはビート・バンドとしてスタートし、ローリング・ストーンズのツアーで前座を務めたこともあるらしい。しかし1971年の「コンチェルト・グロッソ」でストリングスを大々的に導入したクラシカル・ロックを披露、聴くものの涙腺を大いに刺激することとなる。

1972年の「UT」では「パオロとフランチェスカ」という、ダンテを下敷きにしているらしいベタ

ベタなラブソングを演奏している。この曲ではジミ・ヘンドリクスを敬愛し、「イタリア最初のギター・ヒーロー」と称されるニコ・デ・パロが、ギターの音色により恋人たちの会話を再現している。「キュキュ？」「キュキュキュキュ」「キュキュキュ？」「キュー…」「キュキュキュキュ！」といった具合である。最初は、なんという演奏技術の無駄遣いか、と驚きあきれたのであるが、次第にその甘さに麻薬的魅力を感じるようになったのであった。

ラッテ・エ・ミエーレ

Latte e Miele

イタリアにも彼らのようなキーボード+ベース+ドラムの編成による、所謂キーボード・トリオは数多く存在していた。一番売れたのは恐らくレ・オルメなのであるが、ここではラッテを選んでみた。なぜかという、彼らのアルバム「受難劇」（1972年）が宗教センターの所蔵CDに含まれているからである。

「受難劇」はその名の通り、マタイ福音書による受難劇のロック版である。歌はイタリア語である。パイプ・オルガンや混声合唱団も加わり、仰々しくも美しい。彼らの音楽には、ジャズ調のピアノ・トリオから突如ハード・ロックが始まったかと思うと、不自然なところで曲が唐突に終ったり、といっためまぐるしさがある。この、テレビのチャンネルを変えるようなめまぐるしさというのも、イタリアン・ロックの特徴の一つである。

彼らは混声合唱団を従えて時のローマ教皇（パウルス 6 世と思われる）御前演奏を敢行したとも伝えられている。唐突にハード・ロックになる部分では、教皇も驚いたのではないであろうか。

2 作目「パピヨン」（1973 年）も文句ない傑作である。

私はしばしば、歩行中に何らかのメロディーを口ずさんでいる。そういう時は、別段機嫌がいい訳でもないのである。意識的であったり、また無意識であったりするが、空気を吸うように、メロディーが口をついて出るだけのことである。阪急電車の社内広告の文字等から何かの曲名や歌詞の一節が想起され、そのメロディーを口ずさむこともあれば、全く不意に何かの曲が浮かんでくることもある。うかんではよいがその曲が何であるかが思い出せないこともある。寝る前などにこれが生ずると、気になって眠れないこともあるのである。

このために、過去の職場においては、いつも鼻歌まじりで、勤務態度が不真面目であると咎められたこともあるのであるが、私が本当に真面目か不真面目かどうかは、それは神様をご判断されることではないか、と思うのである。